

シェリング芸術哲学の展開

—— 一次文献の編纂状況と近年の研究から

八 幡 さくら

はじめに

二〇一九年十月ミュンヘンのバイエルン学術アカデミーである国際会議が開催された。会議名は「有限な仕方で提示される無限なもの。一八〇〇年頃の美学と芸術の文脈におけるシェリング芸術哲学」(Das Unendliche endlich dargestellt. Schellings Philosophie der Kunst im Kontext der Ästhetik und Kunst um 1800)。¹⁾「有限な仕方で提示される無限なもの」とは、シェリングが『超越論的観念論の体系』(以下『体系』)(1800)の芸術哲学の章で述べた有名な文言の一つ、「有限な仕方で提示される無限なものは美である」(AA1,9,1, 31)に由来する。同会議では、シェリング芸術哲学が論じられた一八〇〇年頃の哲学、美学、文学、造形芸術の転換に焦点を当て、同時代の哲学と芸術について多角的な検証が試みられた。

一八〇〇年前後はドイツ思想界において目まぐるしく変化する時期である。一七八一年に発表されたカントの『純粹理性批判』を発端として彼の批判哲学が、その後のフィヒテをはじめ、ヘーゲルやシェリングらに大きな影響を与えたことは周知の通りだが、哲学と芸術との関係性からみてもその時代は注目に値する。

哲学と芸術が接近する時代の中で生まれたのがシェリング芸術哲学であり、その背景にはカント『判断力批判』はもちろん、シュレーゲル兄弟をはじめ同時代のドイツ初期ロマン主義の思想や芸術活動があった。一七九八年からイエーナ大学で教鞭を取っていたシェリングは一八〇〇年に『体系』を刊行する。その著作の狙いはカント批判哲学の超克にあり、同書の中で自己意識の歴史の最高段階として「芸術哲学」が呈示される。シェリングいわく、没意識的なものと意識的なものとの根源的同一性を外的に示す芸術は、「哲学の唯一真にして永遠なる道具オルガネンかつ証書ドキュメントである」(AAI,91, 328)⁽²⁷⁾。ここに芸術を最高次のものである美的観念論が呈示される。

ただし、シェリングが芸術ジャンルや作品論も含めて包括的な議論を展開するのは、後の講義『芸術哲学』を待たねばならない。一八〇二〜一八〇三年の冬学期にイエーナ大学で、一八〇四年と一八〇五年にヴェルツブルク大学で行われたその講義は、「芸術という形式ないしポテンツにおける全体の学問」(AAII,6,1, 24)とされ、一般部門と特殊部門の二部門からなり、具体的な作品分析も含めた内容豊かな芸術哲学を開示している。二〇一八年に刊行された『歴史批判全集』(AAII,6,1,2)はこの講義『芸術哲学』の全体像を詳らかにする。本講義で例示される芸術作品の中に、一七九八年にシェリングが訪問したドレスデン絵画館に展示されていた作品や芸術家の名が挙げられていることは、当時の美術史や芸術思想と芸術哲学との関係を考察する上で注目に値する。

『芸術哲学』以後もシェリングはバイエルン学術アカデミーでの講演『造形芸術の自然に対する関係について』(以下、アカデミー講演)を行い、その翌年設立されたバイエルン王立造形芸術アカデミーにおいて規約やカタログ作成などの芸術に関わる活動を行っている。ただし、シェリングのミュンヘン時代の芸術実

践活動には未解明な部分もあり、その芸術哲学の展開の検証は今後の研究課題でもある。

近年続々と刊行されている『歴史批判全集』や、一次文献と研究論文を所収する *Schellingiana*¹⁾ さらには二〇一三年から国際シェリング協会が中心となって刊行されている国際的な論集 *Schelling-Studien. Zeitschrift zur klassischen Deutschen Philosophie* (Karl Alber, 2013) によってシェリング哲学の全体像が開示されつつある。また近年国際シェリング協会やバイエルン学術アカデミー主催の会議がドイツ国内外ではほぼ毎年開催され、英語圏では北アメリカシェリング協会の設立と大会開催が行われるなど、シェリング研究はドイツを中心としたヨーロッパ、日本はもちろん、英語圏やそれ以外の国々でも研究が盛んになりつつあり、若手研究者が育ってきている。³⁾

こうした現状を踏まえ、シェリング芸術哲学の研究史と現在進行形の研究状況を把握することが本稿の主旨である。このことはシェリング芸術哲学の哲学史上の位置を定め、同時代の思想内での関係性を考察することに繋がり、それはまたヘーゲルの美学思想との異同を明らかにする可能性を持つ。本稿では、シェリングがミュンヘンで造形芸術アカデミーでの活動に関わっていたという事実から、とりわけ造形芸術を中心に、シェリング芸術哲学のこれまでの研究史上の扱いを振り返った上で、近年のシェリング『歴史批判全集』の編纂状況と二次文献を参照しながら、シェリング芸術哲学の展開と研究状況を整理する。まず、シェリング芸術哲学の概要と著作ごとの異同を確認した上で、一次文献の編纂状況について説明し、一九世紀当時の芸術哲学の受容の状況を整理する。次に、近年のシェリング芸術哲学の研究状況を「同時代性」というキーワードに着目して把握し、そこから浮かび上がってくる新たなシェリング像を呈示したい。

I 芸術哲学の一次文献の編纂状況と受容

1 シェリング芸術哲学の概要

「芸術哲学」(Philosophie der Kunst)とは、主に一八〇〇年から一八〇七年にかけて展開されたシェリングの芸術に関する哲学的議論、または、一八〇二〜一八〇三年と一八〇四〜一八〇五年にかけて行われた講義『芸術哲学』を指す⁴⁾。シェリングが芸術哲学を論じた時期が上述の短期間に過ぎず、その著作の多くが、ヘーゲルによって厳しく批判された同一哲学期に属するという点から、一時的な解決に過ぎないという批判がある一方で、芸術哲学の体系構造の連続性と後期の神話論への繋がりや強調する立場もあり、その評価は様々である⁵⁾。芸術哲学が短期的な解決に過ぎないのか、あるいは、後期にまで続く議論なのか、という問題は先行研究においてしばしば言及されてきた問題であり、頻繁に哲学体系を変え異なる様相を見せることから「プロテウス」と揶揄されてきたシェリング哲学の連続性の問題と重なる。

芸術哲学に関する各著作において芸術と哲学の関係は異なりを見せるが、主たる共通点は以下のようにまとめられる。芸術哲学は1) 芸術哲学は趣味の学ではなく、芸術という形式における学である。2) 芸術は絶対的同一性を客観的に美として呈示する。3) 芸術において働くのは知的直観の一種である「美的直観」である。

芸術哲学に関する各著作間の異同を顧慮すれば、『体系』と同一哲学期の著作群の間には明確な哲学体系の差異がある。一八〇〇年の『体系』は一七九五年の『自我論』と同じく超越論哲学あるいは自我哲学に区分でき、その他の芸術哲学に関する著作は一八〇一年の『私の哲学体系の叙述』から展開される同一哲学に属する。一八〇九年の『自由論』をもって同一哲学は論じられなくなることから、『自由論』が積極哲学へ

の転換点とみなせる。『体系』では、自我がいかにして客観となるのかという問いのもと、理論哲学から実践哲学、目的論を経て最終的に到達するのが芸術哲学である。芸術が最高位に位置づけられるのは、「美的直観」という「客観的になった知的直観」によって、絶対的同一性を自己意識の最高段階である芸術において呈示するからだ（AAI,9,1, 325）。それに対して、一八〇二年から一八〇五年にかけて行われた講義『芸術哲学』は同一性の観点から論じられる同一哲学に即して、絶対者（神）を芸術という形式ないしポテンツにおいて把握するものであり、他の学問や領域に比べて芸術に特権的な地位が与えられるのではない。シェリングは『学問論』の第一四講「芸術学について」の中で同一哲学における芸術哲学の位置とその基本構想を端的に示している。『シェリング全集』（*Sämmtliche Werke*）の編者でありシェリングの息子のK・F・A・シェリングは、『芸術哲学』「序文」と『学問論』第一四講にほぼ同じ文章があり、編集過程でその箇所を前者から削除した経緯を註で示し、『学問論』第一四講は『芸術哲学』への序論とみなすことができると指摘している^⑤。このような経緯を鑑みて『歴史批判全集』AAII,6,1にはEinleitung Aとして『学問論』第一四講も所収されている。また一八〇二年の『ブルーノ』は同一哲学に即して原像と写像という二元論的観点から芸術について論じる。アカデミー講演は、講演という性格から他の著作と並べて論じることに注意が必要だが、その基本構想は同一哲学に準じ、自然への関心の復活という点で注目される。

2 『歴史批判全集』の編纂・刊行と新たなプロジェクト

シェリングの一次文献に関しては長い間、K・F・A・シェリング編纂の『シェリング全集』（SW）に基づいて研究が行われてきた。また以前のシェリング研究においてはこの『全集』（SW）版に基づくシュレ-

ター版が使用されることもしばしばあったが、近年その状況は変化しつつある⁽¹⁾。それというのも、一九七六年にバイエルン学術アカデミーのシェリング・コミッション（シェリング全集刊行委員会）による『歴史批判全集』（*Historisch-Kritische Ausgabe*）の編纂・刊行が始まったからである。T・ブフハイム、J・ヘニツヒフェルト、W・G・ヤーコプス、J・ヤンツェン、S・ペーツラを中心に、アカデミーのシェリング研究者が精力的に編纂作業を進めている。著作に関しては様々な版を研究員たちが協働で読み合わせ、手稿や書簡に関しては写真画像データ等をもとに一字一句検証する。二〇二三年七月時点で、『歴史批判全集』は刊行予定の全三四巻中、三二巻がすでに刊行済み二巻が刊行準備中であり、編纂作業はほぼ終了間際である。C・ビンケルマン氏がシェリング・コミッションの書記長に就任後、加速度的にこの編纂作業が進んだ。シェリングの（Ⅰ）著作と（Ⅱ）遺稿、（Ⅲ）書簡という三系列に分けて編纂されるこの著作集は、各版や講義ノートの異同についてまとめられており、各巻の冒頭に収められている「編集者の報告」により、その著作の全体像を把握することが可能になっている。『歴史批判全集』で刊行された著作等に関しては、この版を使用することが次第に研究のスタンダードとなりつつある。ただし、いくつかの著作については『歴史批判全集』ではなく、*Schellingiana* に収められており、それらにも収められていない著作や遺稿、書簡などに関しては他の全集や版を参照する必要がある、現在も『全集』（SW）やシュレーター版、その他の版の著作集の意義は失われていない。

ここで芸術哲学に関する『歴史批判全集』について見ておこう。芸術哲学に関わる『歴史批判全集』の編纂状況としては、第Ⅰ系列（著作）として『体系』（AAI,9,1-2）、『ブルーノ』（AAI,11,1-2）、『学問論』（AAI,14）、『第Ⅱ系列（遺稿）』として講義『芸術哲学』（AAII,6,1-2）が刊行されている。アカデミー講演

(AA1162) は、V・シュラー・リュネシュロスが中心となって現在編纂中であり、二〇二三年一〇月に刊行を予定している。

シェリング・コミッションが行ってきた編纂作業は新しい形で継続されることになり、フライブルク大学と連携して新プロジェクト「Schelling in München (1811-1841). Hybride Nachlass-Edition」として開始され、時期ごとに四段階に分けて刊行が予定されており、現在第一段階(1811-1820)の遺稿等の編纂作業が進められている。上記のプロジェクトのウェブサイトでも指摘されているように、シェリングはミュンヘン時代一八二二年以降哲学的著作としてのモノグラフを刊行していない。一八〇六年にヴェルツブルクからミュンヘンに移ったシェリングは、翌年のバイエルン王の聖名祝日を記念したアカデミー講演が盛況に終わったことで、バイエルン王立造形芸術アカデミーの書記長となる。その後もシェリングはミュンヘンにとどまり、芸術アカデミーでの仕事の傍ら、著作という形ではないが、哲学的な構想を記したノートや遺稿、書簡、日記等を残している。しかし、これらの資料が網羅的に整理されたことはなく、また芸術アカデミーでの仕事内容などはまだ明らかになっていない部分もある。同ウェブサイトでも指摘されているように、シェリング哲学は「生成途上にある哲学」というX・ティリエットによる特徴づけは今もなお継続している。^⑧

3 『芸術哲学』の受容

筆者の見解では、講義『芸術哲学』が収められている『歴史批判全集』第II系列第六卷(6.1、6.2卷)の特筆すべき点は、シェリングの講義『芸術哲学』の聴講者のノートの比較検討が行われていることにある。『芸術哲学』のテキストはシェリングの息子K・F・A・シェリング(1815-1863)によって編纂された『全

集』(SW)の第五卷(1859)に収められたが、現在オリジナルの原稿の行方は不明なままである。ただし、この講義を聴講していた学生による複数の講義ノートが存在することから、SWを主たるテキストとして、聴講生の講義ノートを補助資料としてテキストの検証が行われ、『歴史批判全集』第II系列第6.1巻には講義『芸術哲学』テキストが、第6.2巻には一八〇二〜一八〇三年のイエーナでの講義のJ・F・H・シュロッサーによるノートとその他の芸術哲学に関わる文献とともに、編者による解説と註が収められており、この二巻本で講義の詳細を知ることができる。

講義ノートの一例として、ケンブリッジ大学図書館にはヴェルツブルクでの講義『芸術哲学』に関するノート(筆者不明)が保管されている^⑩。聴講生のノート間には様々な異同があり、それらを比較検討することによって、イエーナとヴェルツブルクでの講義内容の異同から思想的展開や、実際の講義におけるシェリングによる追加の例示や説明などを推察することも可能だろう。また、シュロッサーと同時期イエーナで『芸術哲学』を聴講した人物として、イギリス人の著述家H・C・ロビンソン(1775-1867)による筆記ノート*Shellings Aesthetick*やエッセイは、シェリング芸術哲学が同時代のイギリスでいかに受容されたかを示す一例である。ロビンソンは書簡や日記など「非公式の」(informal)著作を数多く残した人物で、ゲテやシュタール夫人、W・ワーズワース、S・T・コールリッジなどの幅広いネットワークを持っていた。一八〇〇〜一八〇五年ドイツに滞在し、イエーナ大学にも在籍していたロビンソンは、そこで一八〇二〜一八〇三年に行われたシェリングの『芸術哲学』を聴講し、そのノートを残している。ロビンソンはカント美学と対比させることでシェリング芸術哲学の美の客観的实在性とプラトン主義の再興という特徴を捉える。ロビンソンのシェリング芸術哲学の解釈については、『芸術哲学』の講義録や同時代人たちとの書簡、エッセイな

どの資料とともにJ・ヴィグスがその内容をまとめており、⁽¹¹⁾ The Henry Crabb Robinson Project ウェブサイトでもその資料に接続できる。⁽¹²⁾

II 近年のシェリング芸術哲学の研究状況

1 同時代の芸術思想とシェリング自身の芸術体験

近年のシェリング芸術哲学研究の特徴は「同時代性」にある。先行研究でもしばしば指摘されてきたように、シェリング芸術哲学は同時代のドイツ初期ロマン主義との影響関係の中で生まれてきた。⁽¹³⁾ 事実一八〇〇年前後にシェリングはドイツ初期ロマン主義の思想家たちと盛んに交流していた。シェリングが本格的に芸術作品を鑑賞するのは一七九八年秋のドレスデン訪問時であり、その際シュレーゲル兄弟らとともに絵画館などを訪問している。ちなみに当時の絵画館は現在のアルテ・マイスターではなく、現在交通博物館として使用されているシュタールゲボイデ (Stallgebäude) だった。その鑑賞体験は若きシェリングにとって衝撃的であり、ラファエロら巨匠の作品群に深い感銘を受けたことが、両親宛書簡でも報告されている (20.09.1798/AAIII,1, 191f.)。その経験は『芸術哲学』やアカデミー講演の中で具体的な作品名や芸術家名という形を取って、理論の中に組み込まれている。さらに講義『芸術哲学』を行う際に、シェリングはA・W・シュレーゲル宛書簡で彼のベルリン講義『芸術論』(1801)のノートの借用を依頼している (03.09.1802/AAIII,2, 1, 48)。こうした歴史的事実からも、ロマン主義者達との交流とともに、シェリング自身の芸術鑑賞体験⁽¹⁴⁾が芸術哲学の理論構築のための様々な素材を与えていることは明らかだ。

このシェリングの芸術体験と芸術理論の関係に関して Zerbst (2011) は美術史的な観点から、シェリング

がドレスデン絵画館を訪問した当時の展示状況を当時のカタログ等から検証し、それらのシェリングの作品評価への影響を検証している。当時ドレスデン絵画館の展示には、イタリア絵画を最重要視する当時の美術的価値観が反映されており、より重要なイタリア絵画を内ギャラリーに、それ以外のオランダなど北方ヨーロッパの絵画や風景画などは外ギャラリーに展示されていた。こうした空間的区分に対応する美術史的評価が、シェリングのイタリア絵画の評価に繋がっているとツェルプストは指摘する。

このツェルプストの研究を、T・ヴェッディゲンのドレスデン絵画館の美術史的研究 (Weddigen 2008, 2009) と照合し、シェリングのドレスデンでの鑑賞体験を検討したのが松山 (2015)、『八幡 (2017)』、Yahara (2022) である。ヴェッディゲンは一八〇一―一九世紀にかけてのドレスデン絵画館の展示状況の変化を調査し、カタログや絵画などの情報から、デジタル技術を用いて当時の展示状況を再構成している。松山 (2015) は Weddigen 2009 と絵画館の木製復元モデル等を参照しつつ、作品を観る場としてのドレスデン絵画館の展示状況を詳細に再検証し、作品を観る者としてシェリングや A・W 並びにフリードリヒ・シュレーゲルらの発言を比較している。¹⁶⁾ 八幡はシェリングのドレスデン訪問した当時、コレクションの中で最も高く評価されていた作品、コレッジョ (アントニオ・アレグリ) の《羊飼いの礼拝 (聖夜)》に焦点を当て、ヴェッディゲンによるドレスデン絵画館のデジタル画像を参照しながら、当時の絵画館の展示風景がどのように変化したかを読者に具体的に示し、当時の絵画鑑賞体験を視覚的に理解可能にした。こうした研究を通して我々も当時の展示空間を追体験することが可能になり、当時の鑑賞経験と芸術理論とを照合できる。

ヘーゲルもまた一八二〇年にドレスデン絵画館を訪問しており、その際にラファエロの《システイナナの聖母》などの絵画を鑑賞している。こうしたヘーゲルの芸術作品の鑑賞体験と彼の美学理論の結びつきに関

しては、石川（2019）などの研究によって実証的に調査されている¹⁷。ドレスデンの訪問や本格的な芸術作品の鑑賞時期についてシェリングとヘーゲルを比較してみると、シェリングの方がかなり早いことがわかる。そして、その鑑賞体験と時期を近くして各々の芸術に関する哲学的議論が開始されることを考えれば、実際の作品鑑賞や美術館訪問という体験が哲学的議論に及ぼした影響は明らかだろう。シェリングが若くして学術的なキャリアを積み、ロマン主義者達との交流を重ねたことよって、一八〇〇年前後にシェリング芸術哲学は花開く。ヘーゲルとシェリングの芸術ジャンルや個々の作品ないし芸術家の評価に関しては詳細な比較が必要ではあるが、両者の芸術観が鑑賞体験にどの程度基づいているかという観点で検証するのは重要だ¹⁸。

ただし付言しておかねばならないのは、シェリングの実際の芸術体験が彼の芸術哲学の理論構築に寄与しているのは確かだが、そのドレスデンでの鑑賞経験はシュレーゲル兄弟らを介して行われたものであり、彼らの芸術論からの文献学的な影響も非常に大きい。例えば、コレッジョやラファエロに対する評価について、シェリングはシュレーゲル兄弟から多くを借用しながら、自身の議論を組み立てている¹⁹。それゆえ、芸術作品の鑑賞経験からの直接的な理論への応用だけでなく、文献学的受容も看過できない。

2 シェリング芸術哲学とロマン主義に関する研究―国際会議と二次文献

シェリングと同時代のロマン主義の芸術家、とくにC・D・フリードリヒやP・O・ルンゲとの関係は先行研究においてしばしば言及されてきた²⁰。近年シェリング芸術哲学をテーマに掲げた会議も数多く開催されている。例えば、二〇一一年の五月と七月にバイエルン学術アカデミーで芸術哲学に関する会議が開催された。当時シェリング・コミッションの書記長が美術史家のA・ツェルプスト氏であったことも、芸術哲学と

造形芸術に主眼を置いた会議開催が頻繁に行われたことに関係するであろう。五月に開催されたのは「Grund der Kunst: Schelling und Runge」と題されたシェリングとルンゲに焦点を当てたものであり、七月に開催されたのは「Landschaft - Mythos - Geschichte: Entwürfe der Ästhetik zwischen Schiller und Schelling」として、一八〇〇年前後の哲学と美学の緊張関係に注目し、シラーとシェリングの両者に焦点を当て、それぞれの立場からいかに哲学と芸術の関係が論じられたのかを問うた会議である。両会議に共通する重要なテーマの一つが「風景」であり、シェリングの芸術哲学とルンゲに代表されるようなロマン主義の風景画の興隆、並びにシラーやシュレーゲルの美学が取り上げられ、比較検討された。同会議ではエクスカーションとして、同時期にミュンヘンのクンストハレで開催されていたルンゲの展覧会「Kosmos Runge: Morgen der Romantik」への訪問と、美術史家F・ビュトナーによる作品解説が行われた。シェリングの自然哲学に感銘を受けたルンゲが、風景画において確立しようとした根源的自然の象徴的図像による描写や色彩論に基づく彼の絵画論に、シェリング芸術哲学との親近性が見て取れる。本稿冒頭で触れた、二〇一九年十月開催の『歴史批判全集』の講義『芸術哲学』の刊行記念会議は一八〇〇年頃のシェリング芸術哲学とその同時代の哲学・美学・芸術について様々な観点から迫った。

シェリングと造形芸術に関する近年の研究として、上述のZerbst (2011)の他、D・イエーニツヒの*Weltnetz der Künste: Schelling, Nietzsche, Kant* (2014)を挙げるべきである。イエーニツヒはシェリングの芸術哲学、とくにアカデミー講演がいかに具体的な作品(古代ギリシア芸術、C・D・フリードリヒ、P・クレー)に適用できるかを検証している。⁽²⁾『歴史批判全集』の『芸術哲学』の刊行を受け、さらに二〇一八年のイエーナ大学でのSchelling-Tagのテーマに基づいて、二〇一九年刊行の*Schelling-Studien, Bd.7*では、

「神話と近代」という観点から見たシェリング芸術哲学」(Schellings Philosophie der Kunst unter den Aspekten Mythologie und Moderne)を重点的テーマとして掲げている。シェリングによれば、「普遍的なもの」と特殊なものとの絶対的無差別を伴って絶対者を「特殊なものの中に」呈示すること」は芸術に他ならず、この芸術による呈示のための「普遍的な素材」が神話である(АИИ.6.1, 145)。シェリングはその絶対者の呈示の仕方を図式、アレゴリー、象徴の三つに区分する。とりわけ最も理想的な形での呈示は普遍的なもの」と特殊なもの」とが一体化した象徴であり、アレゴリーは特殊なものを通して普遍的なものを示し、図式はその逆である。シェリングは神話に関して古代と近代、古代ギリシアとキリスト教世界、という大きく二つの区分で論じ、前者を象徴的なもの、後者をアレゴリー的なものと特徴づける。ここで論じられる神話の基本構想は後期の神話に関わる哲学とも共通点が見出せるため、芸術哲学を神話という観点で読解することは、初期から後期にかけてのシェリングの神話論を連続的に読み解くことができるか否かという問いにも関わる。Schelling-Studien.7では様々な視点から集中的に『芸術哲学』の神話に関わる議論が検討されている。

例えば、C・ビンケルマンは芸術に限定されない複雑な神話概念を、「新しい神話」の構想を呈示した「ドイツ観念論最古の体系プログラム」とそれに続く芸術哲学著作から読み解く。『芸術哲学』の個々の節に注目して神話論並びに象徴論を検証してきたD・ウイスラーは、第一〇三節の「逆転した象徴的なもの」に注目した象徴論を論じている。『歴史批判全集』(АИИ.6.1-2)の編纂に関わったD・ウンガーは、イエーナ大学とヴェルツブルク大学での『芸術哲学』の内容的異同を検証し、『歴史批判全集』の刊行によって可能になったシェリング芸術哲学の発展的理解を論じている。

3 ミュンヘン時代のシェリング芸術哲学研究

ミュンヘンのバイエルン王立学術アカデミーで行われた『造形芸術の自然に対する関係について』（1807）（アカデミー講演）は同時代性という観点で見ると様々な興味深い問題を含んでいる。L・シボルスキーはこの講演の最終部分で政治的契機が強調されていると指摘する²²⁾。ここでアカデミー講演の経緯に目を向けよう。講演の前年までにヴェルツブルクからミュンヘンに越してきたシェリングは、それまでに行っていた芸術哲学を自負しており、芸術に関わる仕事を希望していた。こうした状況の中でシェリングはバイエルン王の聖名祝日を記念して行われる講演という荣誉ある機会を得る。当時アカデミーの会長だったヤコービは、シェリングがこの講演を担当することに對してかなり慎重な態度を取っていたが、結局のところシェリングがその役目を獲得する。当日シェリングが約五〇〇人の観衆を前に行ったその講演は評判を呼び、そのおかげもあってシェリングは翌年設立されるバイエルン王立造形芸術アカデミーの書記長に任命される²³⁾。この講演はシェリング自身が編纂した『シェリング著作集』第一巻（1809）にも収められており、彼自身がその内容を自負していたことは明白だろう。

アカデミー講演の内容について見ておく。シェリングは新古典主義的な自然模倣論を批判し、真に自然の精神、その産出性を模倣することを造形芸術に要求する。自然の外観すなわち産物としての自然（*natura naturata*）ではなく、自然を産み出す力そのもの、まさしく能産的自然（*natura naturans*）を芸術の産出性の源泉とシェリングはみなす。W・ヤーコプスはシェリングのアカデミー講演の自然哲学との接近を強調し、さらにその構想が後の造形芸術アカデミーの規約草案作成にも反映されていると解釈する²⁴⁾。

アカデミー講演でシェリングはラファエロの《システイーナの聖母》とガイド・レーニの《聖母被昇天》

を比較して、後者を前者に迫るものとして高く評価する。このレーニ評価の背景には、《聖母被昇天》を含む王の美術コレクションが一般公開される予定になっていたという事実がある。モデナの教会から売却され、デュッセルドルフ美術館で「名譽ある場所」に飾られていたこの作品は、一八〇五／一八〇六年にデュッセルドルフからミュンヘンに移されたばかりであった。そのため、シェリングもアカデミー講演の前に実際にこの絵画をミュンヘンで鑑賞することができた。レーニの《聖母被昇天》の高評価の背景には、学術と芸術を振興しようというバイエルン王の政策の称賛という、アカデミー講演が持つ政治的な意図があったと考えられる⁽²⁶⁾。

シェリングがバイエルン王立造形芸術アカデミーで関わった活動に関しては、L・パレイソンが *Schellingiana Rariora*⁽²⁷⁾、展覧会の告知、カタログ、書簡、批評などの関連資料をまとめている⁽²⁸⁾。ただし、これらの資料がいかに連関しているのか、そこでのシェリングの芸術に関する発言や作品批評が彼の芸術哲学の理論の応用と言えるかどうかは今後検討を要する。ミュンヘンの造形芸術アカデミーでのシェリングの活動を調査した最近の研究の一例として *Yahata (2021)* と *Hackel (2021)* を挙げる。八幡はシェリングの造形芸術アカデミーでの芸術実践活動について、シェリングが携わった書簡や一八一一年の展覧会カタログ、アカデミーの規約草案などの資料から報告している。より詳細なシェリングのミュンヘンでの活動については、M・ハッケルが一八〇六〜一八二〇年のシェリングのミュンヘン時代の活動に焦点を当てて検証している。ハッケルはマクシミリアン一世の下で行われた大改革、とりわけ芸術と学術に関わる改革と、それが引き起こしたアカデミー内での対立について時系列に沿って報告し、当時アカデミーの長だったヤコービと比較しながら、こうした政治的背景の中でシェリングが講演の中で讃えたドイツの統一とバイエルンの功績の意義を分析

し、講演以降のシェリングの哲学的業績についても明確に整理している。

シェリングの同時代の芸術家に対する評価についてもミュンヘン時代の資料から読み解くことができる。L・クナッツは、シェリングがミュンヘン時代に好評していたチロル地方出身の画家J・A・コッホ (1768-1839) の風景画と、C・D・フリードリヒの風景画とを図像学的に比較することで、普遍的理念の呈示という特徴をコッホの作品に見出す⁽²⁷⁾。このコッホの風景画に対するシェリングの評価について、八幡 (2018) および Yahata (2020) は、『芸術哲学』での風景画論とアカデミー講演の芸術論を応用したものとして理解することを試みている。造形芸術アカデミーでは学生たちに対する教育はもちろん、作品収集や展覧会の開催 (初回展覧会一八一一年) なども行われていたため、シェリングが同時代の芸術家や作品に触れる機会は非常に多かったはずであり、シェリングが関わった展覧会やそのカタログ、アカデミーが収集した作品群からシェリングが実際に鑑賞した作品群を検証することが可能だ。こうしたシェリングの造形芸術アカデミーでの役割と同時代の芸術家に対する評価が定まることで、それがシェリング芸術哲学の応用なのか、あるいは新しい芸術論の展開なのかも確定できるだろう。

ところで、シェリング自身も草案作成に関わった造形芸術アカデミーの規約によれば、造形芸術アカデミーでは「神話の哲学」についての授業も設定されていた。しかし、シェリングが造形芸術アカデミーで「神話の哲学」に関する講義を担当したという記録はなく、シェリング自身は同アカデミーではもっぱら書記長としてカタログや記事などの作成に携わっていたと考えられる。上述したように、ミュンヘン時代のシェリングの遺稿や書簡に関しては、現在編纂作業が進められているため、その資料を参照して今後シェリングの芸術実践活動と哲学思想との繋がりを検証できるようになるだろう。

結びとして

時代や著作ごとに次々と変化するシェリング哲学は、我々研究者に新たな相貌を見せ続けている。シェリングは同時代の哲学・自然・芸術に関する多種多様な思想を貪欲に取り入れながら、自身の哲学を創り上げていく。このような変幻自在なシェリング哲学は同時代の思想やテキストを比較・検証することによってのみ、その実態を掴み、思想上の位置を確定していくことができる⁽²⁸⁾。編纂中の資料には多くの研究の種が残されており、こうした状況からシェリング研究はまだ発展途上にあると言える。

註

- (1) 本会議の詳細については八幡 (2022) の報告参照。
- (2) 以下シェリング『歴史批判全集』(Historisch-kritische Ausgabe) からの引用に際しては、略記AAを示し、系列をローマ数字、巻数と頁数をアラビア数字で示す。
- (3) 北アメリカシェリング協会の詳細は八幡 (2019) を参照。
- (4) ギリシア悲劇に人間の自由の実現を見いだす『独断主義と批判主義に関する哲学的書簡』(1795)や、ヘーゲル、ヘルダーリンとともにシェリングが構想した『ドイツ観念論最古の体系プログラム』も、芸術哲学を含むという見解もある。ただし、筆者は「芸術哲学」を哲学体系として初めて明確に提唱した『体系』から芸術哲学と呼ぶに値すると考え、一八〇〇年をその開始時期とみなす。
- (5) 芸術哲学の先行研究の立場についてはKratz (1998) が簡潔にまとめており、とくにシュルツとイエーニツヒの立場が対比される。
- (6) Cf. AIII,6,1, 6f.
- (7) シェリングのこれまでの著作集の特徴とテキストの「クロノローギッシュな配列」の問題点を、一九九三年時点の『歴史批判全集』の刊行状況も合わせて、長島隆が研究資料として報告している。Cf. 長島 1993.
- (8) 当プロジェクトはシェリングのミュンヘン時代の遺稿を以下の四段階に分けて編纂予定。1. 第一期ミュンヘン時代 (1811-1820)、2. エアランゲン時代とミュンヘン大学での幕開け、3. 第二期ミュンヘン時代第一部 (1828-1834)、4. 第二期ミュ

- ンケン時代第二部 (1835-1841)° Schelling in München (1811-1841) Hybridre Nachlass-Edition, Website von Bayerische Akademie der Wissenschaften, <https://schelling.badw.de/start> (2023.07.31最終閲覧)
- (9) 同上。ここで指示されているサイリヘットの著作は Tiliette 1970.
- (10) [Anonymj] » Philosophie der Kunst von Schelling. Jena/Würzburg (1802-1805). Cambridge University Library (Sign.: Add4751), Vagus 2010.
- (11) The Henry Crabb Robinson Project, the Website of Queen Mary, University of London, <https://www.qmul.ac.uk/2015/11/13/the-henry-crabb-robinson-project/> (2023.07.31最終閲覧)
- (12) Cf. Frank 1989° 神林 1996.
- (13) シェリングのドレスデンでの芸術鑑賞体験については、八幡 2017, 109-134 および Yahata 2022 参照。
- (14) Weddigen 2008. 本論文はウエッティゲン氏の教授資格論文であり、一八一九世紀のドレスデン絵画館の展示状況の変遷を詳細に調査し、デジタル技術を用いて絵画館の内ギャラリーと外ギャラリーの室内の壁面ごとの展示状況の変遷を画像として再構成し、当時のコレクションの美術史評価と展示方法の関連を視覚的に明瞭に伝えている。本論文はチューリッヒ大学のリポジトリ (ZORA) で公開されている。ほかにドレスデン絵画館の展示状況の変遷について要約したものととして、Weddigen (2009) や、ドレスデン絵画館の絵画に関する版画集からコレクションを検証する Schuster (2009)「絵画館の再現 模型プロジェクト Mulback (2009) もある。
- (15) 松山 2015, 3-34.
- (16) Cf. 石川 2019, 他に、柴田 2016.
- (17) シェリングの場合、ルネッサンス期を中心としたイタリア絵画や歴史画をもっとも高く評価するのに対し、静物画や風景画などの評価は低く、同時代のドイツやオランダの絵画などに対する言及は『芸術哲学』にはほとんどない。ただし、『芸術哲学』の絵画ジャンル論には風景画に対するアンビヴァレントな評価も見られ、後のバイエルン王立造形芸術アカデミー時代のコッホの風景画評価に繋がる議論を見いだせる。シェリングの風景画論については、八幡 (2018) ならびに Yahata (2020) 参照。
- (18) Yahata (2022) では、A・W・シュレーゲルと F・シュレーゲルの《羊飼いの礼拝 (聖夜)》に対する批評を、シェリングの同作品に対する批評を比較・検討し、光と闇、美と醜という対立項についての議論に前者の特徴があり、光に注目するシェリングの明暗論を指摘した。
- (19) ルンゲはシェリングの哲学について自然哲学者 H・シュテッフェンスを介して知見を得ている。ルンゲの絵画がいかにシェ

- リング哲学と重なるかは以下で論じられている。神林 1999, 31-55.
- (21) 本書はイエーニヒの最終講義を書籍としてまとめたものであり、二〇一八年日本語に訳されている。
- (22) Sziborsky 1983, XXXV. 現在刊行準備中のアカデミー講演に関する『歴史批判全集』(AA1.16.2) では、シユラー・リュネシュロスが講演の経緯と時代背景について詳しく報告している。
- (23) バイエルン王立造形芸術アカデミーは現存するシユン・ヘン造形芸術アカデミーの前身である。ただし、開校当時の所在地は現在の場所とは異なる。バイエルン王による芸術振興という政策の下で、当時多数存在していた芸術学校を王立の芸術アカデミーとして一つに統合して設立された。バイエルン造形芸術アカデミーの歴史に関しては以下の書籍に詳しい。Cf. Gehart 2008.
- (24) Jacobs 2002, 11-28.
- (25) 松山 (2015) はレーニの絵画とカラッチ派の画風を比較した上で、同時代の初期ロマン主義におけるレーニ評価を検証し、原画鑑賞直後のシェリングがレーニの《聖母被昇天》に与えた最高の評価が「時宜に適った」ことであり、「王室の覚えもなきかであったらう」と指摘する。松山 2015, 251-260. 《システイーナの聖母》と《聖母被昇天》の比較については拙稿八幡 (2017), 181-194参照。
- (26) Cf. Schelling 1977.
- (27) Knauz 1999, 240-242. シェリングが好評している風景画の作品画像はYahata (2021)に掲載。
- (28) 松山は、概念的な研究が目指すべきところを、テクスト内在的な研究やモノロギックな哲学研究ではなく、複数の思想家の複数のテクストを思想空間に配置し、ポリフォニックに響かせるといった研究方法をしばしば強調する。Cf. 松山 2004.

参考文献

- Frank, M. *Einführung in die frühromantische Ästhetik*, Suhrkamp, 1989.
- Gehart, N. (Hrsg.), *200 Jahre Akademie der Bildenden Künste München*, Hirner Verlag, 2008.
- Hackel, M. »Schelling in München. Eine Zusammenschau der Jahre 1806-1820«. in: *Schellings Goetheiten von Samolbrcke im Kontext*, C. Danz (Hrsg.), Vienna University Press, 2021, 19-48.
- Hühn, I. (Hrsg.), *Schelling-Studien: Internationale Zeitschrift zur klassischen deutschen Philosophie*, Freiburg im Breisgau/München: Karl Alber, 2019.
- Jacobs, W. G. »Der Zusammenhang der Gründungskunde der Akademie der Bildenden Künste mit Schellings Münchner Rede, Ueber

- das Verhältnis der bildenden Künste zu der Natur«. in: *Schelling und die Akademie der Bildenden Künste*, B. Lypm (Hrsg.), Schriftenreihe der Akademie der Bildenden Künste München, Bd.6, 2002, 11-28.
- Jähnig, D. *Welchezug der Künste: Schelling, Nietzsche, Kant*, Freiburg im Breisgau: Karl Alber, 2014 (「ヘーゲル・ニーチェ・カントの美學から」 三三三社 2018)
- Kratz, L., Die Philosophie der Kunst' in: F.W.J. Schelling, H.J. Sandkühler (Hrsg.), Stuttgart, Weimar: J.B. Metzler, 1998, 109-123. (「ロッセーロ・タナシニ著『田中哲英「形而上學」』「日・ロ・キ」編集・松山壽一監訳『「シェリング」哲學入門』研究の中心地』 旺文社 2006 160-183.)
- . *Geschichte - Kunst - Mythos: Schellings Philosophie und die Perspektive einer philosophischen Mythosstheorie*, Würzburg, 1999, 240-242.
- Mußack, G. »Das Modell der Bildergalerie im ehemaligen Stallgebäude«. in: *Dresdener Kunstblätter. Zweimonatsschrift der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden*, 2009, Jg. 52, Nr. 1, 40-43.
- Schelling, F. W. J. *Historisch-kritische Ausgabe. Im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Stuttgart: frommann-holzboog, 1976- (「五二」).
- . *Schellingiana rartiora*, Luigi Pareyson (ed.), Bottega d'Erasmio, 1977.
- Schuster, M. »Das Dresdner Galeriewerk. Die Publikation zur neuen Bildergalerie im umgebauten Stallgebäude«. in: *Dresdener Kunstblätter. Zweimonatsschrift der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden*, 2009, Jg. 52, Nr. 1, 65-78.
- Schönsky, L. Einleitung. in: F.W.J. Schelling, *Über das Verhältnis der bildenden Künste zu der Natur*, Hamburg: Meiner, 1983.
- Tilliette, X. *Schelling. Une philosophie en devenir. I: Le système vivant, 1794-1821. II: La dernière philosophie, 1821-1834*, Paris, 1970.
- Vigus, J. *Henry Crabb Robinson: Essay on Kant, Shelling and German Aesthetics*, Modern humanities Research Association, 2010.
- Weddigen, T. *Die Sammlung als sichtbare Kunstgeschichte. Die Dresdner Gemäldegalerie im 18. und 19. Jahrhundert*, Habilitationsschrift Universität Bern, 2008 (Buchmanuskript, auf ZORA veröffentlicht). <https://doi.org/10.5167/uzh-122978> (2023.07.31 閲覧) (監査)
- . »Ein Modell für die Geschichte der Kunst. Die Hängungen der Dresdener Gemäldegalerie zwischen 1747 und 1856«. in: *Dresdener Kunstblätter. Zweimonatsschrift der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden*, 2009, Jg. 52, Nr. 1, 44-58.
- Yahata, S. »The Productive Nature of Landscape in Schellings' Philosophy of Art«. *Kobiri: The official Journal of North American Schelling Society*, 2020, vol.2, 67-80.
- . »Schellings' Activities in the Academy of Fine Arts in Munich«. *Academia Letters*, 2021, 1-5.

- 『Schelling und Correggio: Erfahrung in der Dresdner Gemälgalerie und die hieratische Rezeption』、in: *Schelling-Studien: Internationale Zeitschrift zur klassischen deutschen Philosophie*, Hühn, L.(Hrsg.), Freiburg im Breisgau/München: Karl Alber, 2022, Bd.9, 55-80.
- Zerbst, A. *Schelling und die bildende Kunst: Zum Verhältnis von kunstphilosophischem System und konkreter Werkkenntnis*, München: Wilhelm Fink, 2011.
- 石川伊織「ヘーゲルの見た絵画：一九世紀初頭における絵画作品の〈移動〉とヘーゲル『美学講義』」『法政哲学』2019' 15巻' 13-24.
- 神林恒道『シェリングとその時代：ロマン主義美学の研究』、行路社、1996.
- 「ルンゲとシェリング・ロマン派の絵画と哲学」、『シェリング論集3 モデルネの驕り・シェリング『自由論』の現在—』、晃洋書房、1999' 31-55.
- 柴田隆行「ヘーゲルの美術館訪問と美術館構想」、『東洋大学社会学部紀要』2016' 54巻' 5-20.
- 長島隆「シェリング全集の状況—これまでの著作集と新しい全集の現段階」、『シェリング年報』1993' 1巻' 136-146.
- 松山壽一「ポリフォニーとしてのテクスト」、『フチンの詩学とテクスト読解』(増補改訂版) 科学・芸術・神話・シェリングの自然哲学と芸術・神話論 研究序説』、哲学叢書、2004' 241-279.
- 『造形芸術と自然』、ヴィンケルマンの世紀とシェリングのシュンハン講演』、法政大学出版会、2015.
- 八幡さくら『シェリング芸術哲学における構想力』、晃洋書房、2017.
- 「シェリングの風景画論における気分」、『美学』2018' 66(1)号' 37-48.
- 「【国際会議報告】第六回北米シェリング協会大会報告」、『シェリング年報』2019' 27巻' 120-125.
- 「【国際学会報告】国際会議 Das Unendliche endlich dargestellt. Schellings Philosophie der Kunst im Kontext der Ästhetik und Kunst um 1800 (2019年10月8-10日)」、『シェリング年報』2022' 30号' 124-127.
- 本論文は、二〇二二年一月八日に第一回日本ヘーゲル学会フロンティア研究部会(オンライン会議)で発表した原稿を加筆・修正したものである。また本研究はJSPS 科研費 JP21K12874の助成を受けたものである。

(やはた さくら・東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文学開発センタープロジェクト「尊厳学の確立」特任助教)